



COLORS, FUTURE! ACTIONS KAWASAKI 100th

2024年、川崎市は市制100周年をむかえます。

川崎のまちは、おもてなしの心で栄えるまち。

江戸から2番目の宿場町として、また川崎大師の門前町として発展してきた東海道川崎宿。旅する人々をおもてなしする心は引き継がれ、川崎駅周辺は現代においても食や遊びの文化が栄えるまちとして発展し続けています。

私たちの毎日も、きつとこの土地と歴史に刻まれていく。

100年目の川崎市ではじまるColors,Future! Actions。

このまちを発展させてきた人たちに感謝を抱きながら、
未来の人たちへとつないでいく多彩なアクションを、さあいっしょに。

Photo / 川崎区 銀柳街 川崎市市民ミュージアム提供 昭和38(1963)年頃



Colors, Future!

いろいろって、未来。

川崎市

川崎市市制100周年記念

7区の歴史を振り返る



特設サイト

<https://www.city.kawasaki.jp/170/page/0000147126.html>

2024年、川崎市は市制100周年をむかえます。

その歴史を知るため、川崎市7区をぶらりと歩いてみました。

それぞれの区の昔の写真を手に、歩いて、見て、聞いて、感じて、発見したこと。

それは今に至る100年の発展の理由でした。

あなたの住んでいるまちの昔を知っていますか？

過去にはこれからの100年先の未来を考えるヒントが、きっとあるはずです。

裏面では
川崎区を
ぶら歩き!

歩いて発見！
知ってナルホド！

ぶら

川崎区



川崎区はなぜ日本の高度経済成長を支えることができたのか？

京浜工業地帯の中心に位置する川崎区は、日本の高度経済成長を支えた工業の街。工場は日本各地や海外から来た多くの人たちにも支えられていました。川崎市のも多様性の原点を見つけに、ぶら歩き。



かつての賑わいの記憶が残っています

川崎区役所
まちづくり推進部
企画課
高橋和仁さん



案内人はこちらのお二人

川崎区役所
まちづくり推進部
企画課
久保寺勝行さん



紡績という会社の工場があり、全国各地から女性たちが集まり工員として働いていた。その中で最も数多かったのが、沖縄出身者だったそうだ。

ぶら川崎区② 銀柳街

にぎわった駅前商店街 銀座街には名古屋城があった？

駅の東口から南東に向かうと、銀柳街に出る。全長約250mに約60店舗が並ぶ商店街。多数のステンドグラスや、天窓が設けられた開閉式アーケードが自慢だ。戦後まもない1946(昭和21)年からその翌年にかけて、京急川崎駅からかつての映画街まで300本ほどの柳の木が植えられたところから、銀幕の銀と柳を合わせて銀柳街と名付けたという。

銀柳街から新川通りを越えて南側、ラチッタデッラが建つあたりには、1937(昭和12)年に6館の映画館が開業。銀映街(川崎映画街)と呼ばれ親しまれた。戦災で焼失してしまっただが、戦後次々開業した。市役所通りを越えて北側には、約30店舗を擁する銀座街がある。かつてこの商店街には「城」があった。愛知ふとん店の店舗屋上に初代店主が、故郷の名古屋城天守閣を模した5層の建築物を作ったのだ。



提供：小林一三氏
愛知ふとん店の初代・小林明氏は、愛知県の豊橋出身で宮大工だった。同郷の人々に買いに来て欲しいと願い、自らの手で立派な「名古屋城」を作った。

ぶら川崎区③ 桜川公園

かつての市電は ひっそりと公園で保存されて

1969(昭和44)年まで、川崎駅と臨海部は市電(路面電車)で結ばれていた。市電は、朝晩、通勤の労働者でいっぱいだったね」とは、タクシーのベテラン運転手さん。彼の運転で、

市電は川崎駅東口の小川町から走り出した。産業道路までは今も市電通りと呼ばれており、標識が立っている。電車は道路の中央を走行した。



1962
カラー化写真

白黒写真カラー化プロジェクトとは

かわさきマイスターの印刷技能士・流石栄基さんにより、昔の川崎の白黒写真20作品をカラーで再現しました。プロジェクトはガバメントクラウドファンディングによって実現されました。



2022

市電は1944(昭和19)年に、小川町から渡田3丁目までの2.76kmが開通。1952(昭和27)年には京浜急行塩浜駅まで延伸。公園内の展示車両は東京を走っていたものを1947(昭和22)年に川崎市が買い取った。

川崎の路面電車

朝の川崎駅前

提供：川崎市市民ミュージアム



1963
カラー化写真



2022

川崎駅が開業したのは1872(明治5)年。左写真のように、高度経済成長期には多くの人々が市電やバスで臨海部に向かって行った。現在の利用客数は1日平均約16万人。東口は京急川崎駅もあり、ラッシュ時にはごったがえす。

提供：川崎市市民ミュージアム



2022

銀柳街は1949(昭和24)年に、小売店など10店が集まって興した商店街。1994(平成6)年アーケードの入口に、国内最大級の全長15mものステンドグラスアーチが設置された。



1963
カラー化写真

銀柳街

川崎駅前ひっそりとたたずむ 沖繩の魔除けの石碑

2011(平成23)年に再整備が完了したJR川崎駅の東口広場。その一角に、人の背丈くらいの石碑を見つけた。朝のラッシュ時、その前で足を止める人はなく、皆、せわしなく移動しているが、なかなかどうして立派な作りではないか。

宮古島特産のトラパーチンという石が使われている。戦前から沖縄と関係が深い川崎市は、1996(平成8)年に那覇市と友好都市となり、交流を深めている。



これはなに？ 石碑の裏に記されている由来によると、1966(昭和41)年9月、宮古島をはじめとした沖縄諸島が複数回の台風襲われ大きな被害を受けた際に、川崎市は積極的な救援活動を行った。それに対する礼として、宮古島から贈られたという。川崎区役所の久保寺勝行さんが説明してくれた。

「石敢當は古来から沖縄で魔除けとして置かれる石碑です。近代以降川崎と沖縄は結びつきが強く、沖縄出身の移住者が多いのです」
大正時代、現在、川崎競馬場のある場所に富士瓦斯

川崎が海苔の産地だった？

工業地帯のイメージが強いが、遠浅で豊穡な海で海苔の養殖が盛んだった時期もあった。1934(昭和9)年頃は、400世帯の漁師のほか、出稼ぎの人も手伝いに来ていた。

京急のはじまりは？

京浜急行といえば泉岳寺と浦賀を結ぶ本線のイメージが強いが、最も古い路線は大師線。1899(明治32)年の開通(当時は大師電気鉄道)で、電車としては日本で3番目に古い。

川崎区トリビア

